

教務だより

2012年5月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

「学ぶ」ということ

茗溪塾塾長 宇野 雅春

ゴールデンウイークも終わり、初夏に向けて汗ばむ季節になってきました。疲れも出てくるせいか、4月まではちょっと頑張っていた生徒たちの中でも、決まってささやかれてくる「こと」があります。「勉強なんて、何の役に立つんだろう？」ということです。

大人でも、本気で「勉強なんて意味がない。」という人はよくいます。決まって高学歴で社会的にも成功している人です。確かに基礎学力がすでに備わっている人や、社会で自分の位置が決まっている人にしてみれば、「学問」よりもっと大切なことがたくさんあるということは、よくわかります。

最近大学生の間でこんなことが言われているそうです。「『因数分解なんて、世の中に出たら**そんなもの**何の役に立つのか?』とよく言うけれど、『**そんなもの**もできないあなたは、何の役に立つのか?』やることがありすぎる今の社会で、勉強からはぐれてしまう大学生も多いのだろうと思います。

ゴールデンウイークの最中に今年は義父と義母がいる福島に行ってきました。原発から離れているといっても、原発事故は、日常生活の中では、まだ深刻な影響を与え続けています。震災以来、家の窓は閉め切ったままということでしたし、美しく咲き誇る桃の花は、結局は収穫されないうららということでした。震災の時に水を分けてくれた近くの農家は、桃の木のほとんどを、切って捨ててしまったそうです。庭にあるたくさんのフキノトウは、そのまま捨て置かれ伸びきって開いてしまっていたし、野菜なども福島のものも全く使わないということでした。そんな中で見た NHK のドキュメンタリー…。立ち入り禁止地域に近い南相馬市の酪農家の親子の一年間の記録は、強く心に響きました。牛乳を毎日絞っては捨て、絞っては捨て、の毎日。放射能が検出されないといっても、公的な機関は、何の手助けもできないでいます。家族の懸命な日常が描かれていました。やむなく親から離れて中学に通うことになった息子は、その中で「進学校」を受験する決意をします。

塾にも通い始め、勉強に集中します。祖父母、両親も含めた家族の将来が自分にかかっていることを本人は感じています。親からも酪農の現状について説明されたりします。

震災直後の栄養不足が影響して、牛乳の量が大きく減っていることや、祖父が医者から内部被爆の疑いで再検査を通告されていることなど、深刻な状況が周りにはあります。

特に印象的だったのが、進学のことと担任の先生と面談した時のことです。解決策の見つからない酪農家の現状の中で、受験を決意したということについて、先生は言います。

「学ぶことで何かいい方法が、見つかるかもしれないよね…」そんな風に言いながら先生は、『学ぶ』ってそういうことだよね!」と自分にも言い聞かせるように本人を励まします。今すぐできることとは違うかもしれないけれど、現状を打開していくために本当に必要なことは、すぐできるというよりは、地道な「学び」であるということ。今に振り回されるより、問題解決に向け小さな一歩でも前に進むということ。

家族を支え、生活を支えていく一歩が受験での「合格」ということなのです。悩む親の前で、自分の進路を選択していく息子が生き生きと頼もしく見えました。

「勉強」というのは地味なことだけれど、未来を作ることに欠かせないことであることを教えられた気がします。学ぶことで「高い教養」を身につけることは、豊かな生活を築く上で大切なことです。更に、次々と私たちを襲う様々な問題を解決する方法も学問を抜きには考えられないのも事実です。一人一人が努力をし、自分の道を切り開いていく事が、一番大切なことに思えました。地震や原発で、マイナスの出発点に立たされた人も、いま先頭を走っている人もそこでは強くつながっている気がします。